

| お 名 前            | 性 別 | 満年齢   | 終戦時の年齢 | 現 住 所           |
|------------------|-----|-------|--------|-----------------|
| 大森 金末<br>(旧姓 安形) | 男 性 | 8 8 歳 | 2 3 歳  | 豊橋市<br>(富岡東部出身) |

## 手記 「太平洋戦争の片隅で ある元兵士の記録」より抜粋

### 「召集令状」

「三日後に中部第11部隊に入隊せよ。」

昭和19年春、召集令状が来たと出張先に連絡があった。当時教員をしていた私は、海洋少年団指導者の宿泊講習に出かけており、その講習会場に連絡が入ったので、その日夜半に家に帰った。

国防婦人会の代表者が、千人針の腹巻きを届けてくれた。それは、女性千人が一針ずつ結び、これを身につけていれば銃弾は逃げると言われるものだった。私はこれを手にした時、「死に出かけるのだ」という思いと同時に、「私のことを案じてくれる大ぜいの女性の心」を感じた。

出発の朝、おふくろが「生きて帰れよ」と言った。私は、胸がつまって返事ができなかった。令状が出てから、親子で話をする時間はほとんどなかった。当時のしきたり通り、村の境（今の企業団地入口の信号機辺り）まで近隣や部落の人々に送られ、そこであいさつをした。部落の若者はほとんど軍隊に入っていたので、残る若者は学生と生徒のみであった。部落の人たちは、どのような気持ちで出兵する者を送ったのだろうか。誰も自分の思っていることを、素直に口に出して言えない。戦争批判でもしたら、知らぬ間に警察に通報され、「危険人物」とみなされるような社会状況になっていたのだ。

北山峠を通り、飯田線の新城駅で電車を待っていた。私と同じように召集された者が数名待っていた。親せき、隣人、身内と思われる人たちで駅は混雑していた。私は、当時好意を持っていた幼なじみの女性の顔をもう一度見たいと思ったが、それもかなわずついに電車は発車した。その時、涙がとめどなく流れ出た。



▲ 昭和11年秋の新城駅前（東三河の100年より）

### 「バシー海峡」

私たちは、13隻の輸送船団でバシー海峡を一路南方に向かってい

た。夜が明けた頃だった。ドーンと鉄の大きな衝撃音、続いて地震のようなすさまじい揺れ。臓器をゆさぶられるような感じで、「やられた！」と思った。推進音

が止まった。輸送船の機関部に魚雷が命中したらしい。皆急いで甲板に飛び出した。他の輸送船は、右に左に全速力で逃げていた。それらの船の姿は遠のき、どこをながめても波しかみえなくなってしまう。

私たちの船は動かない。船倉内は、もう半分近くが海水につかり、下からも海水がもくもくと吹き上げている。海水は甲板まであと2 mぐらいにまでせまった。

「退船、退船！」退船ラッパの合図と共に、皆次々に海に飛び込んだ。私は氏神様に、「どうかお守り下さい！」と祈った。困った時の神頼みか、生への本能か、思わずその言葉を口にした。夢中で泳ぎ、100 mぐらい船から離れたと思った頃、振り向くと、船は中程が折れて垂直になり、前後が同時に海に沈もうとしていた。飛び込み遅れた10数名は、甲板を滑り落ち、海の中に落ちた。そして、船の姿はすぐに見えなくなった。(その後、救助船に助けられる)

### 「ダバオ山岳地帯（フィリピン、ミンダナミ島）」

私たちは本隊と離れ、迫撃砲や速射砲に追われるように、山岳地帯へ入った。食糧も底をつきそうになってきた。野営が何ヶ月も続いたが、考える余裕はなかった。野営地に着くと、まず自分の寝床を作った。直径7、8 cmの雑木を利用して長方形のベッドを作る。高さは50 cm以上にした。夜中にスコールが時にあり、ヘビや大トカゲを避けるためだった。平らな畳の上でゆっくり寝たい。死ぬ時は畳の上で死にたい、とかなわぬ思いを口にして、互いの気持ちを発散していた。戦友たちの顔は、それぞれにほおの肉が落ちてきた。山岳地帯を歩く時は、何か食べられそうな物はないだろうかと、まわりを探るように歩くようになった。カタツムリや地中に球根ができるいも類の根。逃げ足の速い小動物は、捕まえることは無理だった。

他部隊の落伍者が休息しているのが目立つようになってきた。私は、見たくないものを見てしまった。兵隊が道横に寝ていると思ったが、もう動くことはできない状態、うつろな目、口元は何か言おうとしているのかわずかに動いている。体全体がむくみ、ズボンがはちきれそうに大きな体になっていた。明日は自分もかと感じながら、通り過ぎるしかなかった。山を登っていくと、何人かの遺体が横たわっていた。スコールと暑さのためにむくんだと思ったが、今になってみると、栄養失調や塩分不足もあったのではないかと思う。

### 「砲撃止まる」

戦友に肩をゆすられ、眠りからさめた。砲撃音が止まっていた。どうしたのかと戦友に聞いたが、戦友も分からない。次の日も砲撃音は止まったままだった。日本が勝ったのかと、そんな思いがよぎったが、体力はもう限界状態だった。

それから数日後、飛行機の爆音の間に、日本語が聞こえてきた。「戦争は終わったから山を下りるように……」と聞こえた。私は、日本が勝ったなど夢のような

気がした。飛行機は何回か旋回<sup>せんかい</sup>して、放送を続けている。よく聞いていると、「日本は降伏<sup>こうふく</sup>した。早く山を下りるように……」と繰り返している。日本が降伏<sup>こうふく</sup>などする訳<sup>わけ</sup>がない。敵の謀略<sup>ぼうれき</sup>だと思った。しかし、放送の話し声は日本人だと思った。とすれば声の主は、日本人の捕虜<sup>ほりよ</sup>？ミンダナオ島の在留邦人<sup>ほうじん</sup>？ハワイへ移住した日本人？……………

いずれにしても、私の心の内は複雑な思いでいっぱいになった。

飛行機からビラが投下されるのが見えた。上官は拾うなと命令した。初めは拾う者はいなかったが、何が書いてあるか見たいという思いは皆同じだった。いく日か過ぎた頃、投下されたビラを見ることができた。内容は昭和20年8月15日に日本が降伏したこと、三河地方南部に大地震があり、蒲郡、形原方面の被害は非常に大きい、というものだった。信じたくないという気持ちと共に、不安な気持ちを取り去ることはできなかった。

砲撃が止まって1ヶ月ぐらい過ぎた頃、日本の降伏は事実らしいと誰もが認めようになった。しかし、投降<sup>とうこう</sup>すれば殺されるとの思いが先に立ち、生きていくにはどうすればよいか、私は心の準備ができなかった。なぜか…。それは召集前に、日本軍が中国で投降<sup>とうこう</sup>してきた兵を虐殺<sup>ぎやくさつ</sup>した話を聞いていたこと、また、もし米軍が日本に上陸したら、子女はなぶりものにされると教育されていたこと、そして、敵が上陸してきた時の備えとして竹やり訓練をしたりして、最後の一人になるまで戦うのだと教えられていたこと等、そんなことが頭の中をぐるぐるめぐり、日本が降伏したといっても、どうしてよいか困惑した。

## 「投 降」

私たちの小隊は本隊と連絡をとっていたが、「明後日投降する」ということになった。小隊長は全員に、「各個の判断で投降か否かを決めるように」と話をし、それぞれの決断を待っていた。捕虜になる屈辱<sup>くつじよく</sup>……、内地を出る時、戦場で捕虜になることなど、許されることではなかった。その前に自決するのが男子であると教育されていた。今、その決断の場に立っている。死は怖く、恐ろしく、簡単には決めることなどできない。反面、もし捕虜になれば殺されるかもしれない思いながらも、心の隅<sup>すみ</sup>で「もしかしたら……」というわずかな望みにかけて、投降することに決めた。

今まで苦難の日々を共にしてきた小隊長に従うことに決めた。敵に降伏することは、どのような方法で殺されても皆いっしょだという集団心理が働いたか……投降を決めることは非常に怖かった。

その日、装備<sup>そうび</sup>を整えて山を下りた。先頭は小隊長、出発前にシャツを四角に破り、細い木の棒<sup>ぼう</sup>の先にくくりつけた。白い旗は投降の目印だ。いよいよ行動開始、

きんちよう

緊張……小隊長の後に続いた。

しかし、足は鉛をつけているように重く感じた。数時間山を下りた頃、草原地帯に出た。しばらく行くと前方にいくつかのテントが見えた。収容所だ。入口に近づき、止まった。

テントのまわりは、鉄条網が3, 4 mぐらいの高さまで張り巡らされ、入口には数名の黒人兵がいた。銃をこちらに向け、怒声のような大きな声でまくし立てる。早く銃を置けということだった。

隣の収容所には、日本の軍属であった朝鮮人と台湾人が収容されていたようで、私たちが入った時に、数名が投石を始めた。「おれたちは戦勝国だ」と日本語でわめきながら投石を続けた。私は、ミンダナオ島に朝鮮人と台湾人がいたとは知らなかった。彼らは日本軍に強制徴収されたのではないかと思った。日本の軍隊に、相当反感を抱いていたように思われた。



▲ 降伏する兵士(沖縄)

昭和20年6月

## 「復 員」

最初の帰国船が出るらしいとうわさが流れた。帰りたいという気持ちと、期待されて戦場に送られたのに期待に添えなかったという気持ちが交錯し、苦しく複雑であった。日本は降伏したのだから仕方がない、と思っても納得できる答えは浮かばなかった。

私たちの所属部隊全員が、最初の帰国船に乗ることが決まった。乗船する時にアメリカ製の毛布が支給された。船は大きく、揺れも感じず、速いと思った。

「富士山が見えるぞ！」の声に、急いで甲板に出た。海上から初めて見る富士の姿、水平線上には白い霧が立ちこめ、その上に白く雪化粧した富士の姿がくっきり浮かんでいた。（国破れて山河あり）の言葉が頭を走った。私たちの戦いは、バシー海峡以来、一度も優位には立てなかった。しかし、日本の土を再び踏めるのだと思うと、とめどなく涙がこぼれた。

興奮からさめた私は、ふる里を出る時、期待され出征したことが思い出された。このまま帰ってよいのだろうか。ふる里の思いは、1年前の状況しか出てこないが、今はどんな状況であろうか……。わずか1年半だが、何十年も過ぎたような感じであった。どうしよう、敗残兵が帰って笑い者になる、しかし逢いたい人はいっぱいだ。……予期しなかったことが突然現実として起こり、気持ちの整理ができなく、心は大きく揺らいだ。……家を出る朝のおふくろの顔が浮かぶ。

着いた所は東京湾入口の浦賀だった。ミンダナオ島にいた毎日は、死との境で行動していた。浦賀に上陸した時は、死からの開放を実感した。昭和20年11月末のことだと、後で分かった。

東海道本線の列車に乗って驚いた。車内はうす暗く、窓ガラスは割れていて、薄い木の板が打ちつけてある。その隙間より流れ込む、暮れも近いことを思わせるような木枯らしが肌にしみる。何とも荒れ果てた光景に声も出ない。

乗ってきた乗客は、皆疲れ果てた様子であった。そして、乗り込んだ私たちを無表情で迎え入れた。重油で汚れのひどい軍服姿を見られたくない気持ちがあったので、列車内の薄暗さは幸いした。沿線の町並みは暗く、時たま電灯の光がぼんやり一つ二つ見えるだけで、爆撃で破壊された家並みが遠目に見えた。内地もB29の爆撃で壊滅状態になったように感じた。

豊橋で下車した。私は下りホームで場内を見わたした。飯田線・名鉄方向に鉄骨屋根の一部だけが残っているのが目にとまった。その向こうの背の高いヌカビルの壁は焼け落ち、鉄骨だけが突き立っている。あとは黒く焼けくずれた家並みが、手つかずの状態で向山台地方面まで続いているように感じた。旭橋方向に電灯らしき光が一つ二つ見え、そこに人がいるのだと思うと何となくぬくもりを感じた。

駅員から新城行きの終電があると聞き、ほっとした。新城駅に着いたのは、夜の12時頃だと思った。出征の日、駅は混雑していた。わずか1年半、私は何をしていたのだろうと思いながら、ひっそり電車を降りた。

家の前に立って、やっと帰ったという気持ちになった。大戸（入口で二重戸になっている）を2、3回ドンドンたたき、「帰ったよ！」と叫んだ。しばらくして、中からおふくろの声がした。「かねかヤァ～」と言いながら戸を開けた。びっくりした顔で、「お前足があるか」と言った。私は片足を上げ、両手をたたいて見せた。おふくろは、やっと亡霊ではないと信じてくれて、「中に入れ」と言った。おふくろは、近隣で出征した者はほとんど帰っているの、1年半音信不通の私は戦死したものだと思っていたようだった。

私は、着ているものにシラミがついていることを話し、外で着替えをした。家に入り、神棚の前に座り手を合わせた。そこには膳があり、私の写真の前にご飯が供えてあった。「蔭膳」……召集で家を出る時、「生きて帰れよ」と言ったおふくろの気持ちがすべてだと思った。

1年半ぶりにお風呂に入り、身も心も人間に戻ったような感じがした。あばら家でも、畳の上で寝ることができる。戦場で小枝が背中にくい込み、隣の戦友と寝心地の悪さをつぶやいたことなど、夢の一コマのようであった。